『中世思想研究』原稿執筆のガイドライン

Ver.1.0.2: 2024.07.05.

中世哲学会編集委員会

本ガイドラインは，一般投稿原稿，および編集委員会より依頼するシンポジウム関連原稿について，執筆のガイドラインを示すものです。
一般投稿原稿についての投稿者の資格，投稿原稿の種類・分量，投稿原稿の提出方法等については「中世哲学会研究機関誌投稿規程」を，また，シンポジウム関連原稿についての詳細は「中世哲学会シンポジウム関連原稿執筆要領」を参照ください。

1 はじめに

およそ学術文書には，限られた紙面で情報を正確に伝えるために「約束事」（style）があります。欧米の大学では，たとえば英語圏では “Academic Writing” という授業があり，学生は学部一年次でこれを学びますが，日本ではこの教育はほとんど行われておらず，研究者は見よう見まねでこれを身につけているのが現状です。

このような事態に鑑み，また中世哲学会研究機関誌『中世思想研究』の学術的な質を維持するために原稿執筆のガイドラインを作成しました。執筆者各位においては，以下の 2 点をご留意の上，原稿を執筆・提出してください。（なお以下のガイドラインは，本ガイドライン末尾の参考文献を参照し，可能な限り標準的なものを採用しました。）

1. 以下のガイドラインは強制的なものではありませんが，校正作業の負担軽減のためにも，可能な限りこのルールに沿った原稿を執筆・提出してください。
2. また，原稿提出後の校正作業等で，このガイドラインの範囲内で提出原稿の表記等を変更することがありますので，この点をご了承ください。

2 原稿執筆のルール

2.1 日本語本文

・**本　文**：明朝体で執筆してください。

・**句読点**：本文は横書きですので，全角の「，」および「。」を用いてください。

・**強　調**：「ゴシック体」ないし「圏点」を用いてください。強調のための「傍点」は横書きでは用いません。

・**スペース**：全角スペースは用いず，半角スペースを用いてください。

・**機種依存文字**：半角カナは使用しません。和文用の記号で半角のもの（半角かぎ括弧など）も同様に使用しないでください。〇囲み数字も同様です。

・**カタカナ表記の人名・地名など**：

－長音文字，半母音，有気音(帯気音) の表記の問題があります。

＊「プラトーン」にするか,「プラトン」にするか。

＊「アウグスティーヌス」にするか,「アウグスティヌス」にするか。

＊「ギリシア」にするか,「ギリシャ」にするか。

＊「マリア」にするか,「マリヤ」にするか。

＊「ピロン」にするか,「フィロン」にするか。

＊「ポルピュリオス」にするか,「ポルフュリオス」にするか。

－論文中で一貫していれば結構です。

－「慣用に従う」ということでも構いません。

・**挿入文**：

－和文の挿入語句の前後には2倍ダーシ（倍角ダッシュ）を用いてください。前後にスペースは挿入しません。

（例）彼の生きた「デカルト革命」――機械論と心身二元論――以降の状況を……

－欧文の挿入語句の前後に用いるダーシ（em ダッシュ）は全角相当です。前後にスペースを挿入します。

（例）Here — or so it seems to me — Aristotle makes ...

・**引用文の途中省略**：

－通常文の省略：三点リーダー2個（……）を用いてください。

（例）ただひとつの普遍的な場所，……これを空虚と呼んでも少しもかまわない。

－列挙の省略　：三点リーダー1個（…）を用いてください。

（例）トラキア，…，ボイオティア

－横書きでは，いずれの場合も「ナカグロ」(・）は用いません。

－欧文の省略では半角ピリオド3個（...）を用います。文末のピリオドと重なる場合は半角ピリオド4個（....）となります。

2.2 章・節の組み方

章･節の組み方は本文の内容と密接に関わっているので一義的に規定することはできませんが，以下に標準的な組み方を2つ掲げます。

・**アルファベットと数字による組み方**

```
I. 編にあたる
  A. 章にあたる
    1. 節にあたる
      a. 項にあたる        ←　数字とアルファベットを交互に用います。
        (1) 目にあたる
          (a) 細目にあたる
```

・ポイントシステム

1 編集の技術
1.1 原稿指定の方法
1.1.1 本文の指定

← 下位の項目になるにつれて数字が増えます。

2.3 注について

・MS-Word の脚注機能を用いて注を作成してください。注は，稿末注（文末脚注）ではなく，脚注としてください。

・引用文（和文）の途中省略を行なう場合は，本文の場合と同様，三点リーダー2 個（……）を用いてください。

・引用文（欧文）の途中省略を行なう場合は，本文の場合と同様，ピリオド 3 個，（文末の場合はピリオド 4 個）を用いてください。

【参考】注と註: 式部良明『漢字の用法』角川書店，1982 年には次のように書かれています。「注」は「そそぐ」意味。本来は言葉の場合にも「注」を用い，「注解・頭注」などと書かれていた。後に，言葉の場合だけサンズイヘンをゴンベンに改め，「注」を「註」とした。これを，本来の「注」に戻すのが現代表記である。

2.4 参考文献一覧

・文献表は，本文で参照したものと，特に重要なものに限ってください。網羅的な参考文献一覧は必要ありません。

2.5 外国語に関わる問題

2.5.1 独・仏・伊・西語など

・ドイツ語のウムラウトやエスツェット，フランス語のアクサンやセディーユなどは，すべて UTF-8 の文字コードで出力可能ですので，その文字のままファイルを作成してください。

2.5.2 ギリシア語

・原則としてローマ字転記は行いません。

・UTF-8 の文字コードでは，古典ギリシア語（Polytonic），近代ギリシア語（Monotonic） がディガンマやコッパなどの特殊文字も含めて表記できますので，その文字のままファイルを作成してください。

2.5.3 ラテン語

・ラテン語では，U とV，u とv，I とJ，i とj の問題が一番面倒です。

・この問題はかなり複雑で，Corpus Christianorum などでも統一はとれていません。

・論文内で一貫していることを原則とします。

2.6 数字，記号等

・漢数字以外の数字とアルファベットはすべて半角にしてください。1 桁の数字，1 文字のアルファベットもすべて半角です。

・世紀や年号，巻・章・節・行の表記にはアラビア数字を用いることを原則とします。

・巻・章・節等の表記は次のようにしてください。

－和文の場合：「第」をつけて数字はアラビア数字にする。

（例）『告白』第 11 巻第 4 章第 6 節

－欧文の場合：次のいずれかの形式に従う。

（例）*Conf.*,12.4.6.　　　*Conf.*, l.12, c.4, n.6.

・ローマ数字は，半角英文字の I，i，V，v などを用い，全角文字のローマ数字（機種依存文字）は用いないでください。

2.7 括弧類

・**和文中の括弧**：和文中ではすべて全角を用いてください。

・**欧文中の括弧**：欧文中で，かつ中身が欧文の場合には半角括弧を用いてください。

・**かぎ括弧**：かぎ括弧を入れ子にする場合は，奇数番目は一重かぎに，偶数番目は二重かぎにしてください。

……「……『……「……」……』……」……

・欧文中の引用符: 引用符を入れ子にする場合は，奇数番目はシングルに，偶数番目はダブルにしてください。

...‘...“...‘...’...”...’...

2.8 引用について

2.8.1 一次文献（古典著作家，中世の著作家の著作）の引用

［引用の仕方］著作家名・著作名・（使用校訂版）・引用箇所

・欧文では，著作家名についてはローマン体を用い，著作名についてはイタリックを用いてください。（下記 1-1, 1-2, 1-3, 1-4 参照）

・よく知られている古典著作家の場合，著作家名，著作名については略語を用いても構いません。略記の仕方は LSJ，OLD を標準とします。（下記 1-1 参照）

・プラトンの Stephanus 版, アリストテレスの Bekker 版などのように標準的な版（edition）がある場合には，それに従って引用箇所を記述しても構いません。（下記 1-1 参照）

・欧文著作名の二語目以降の冒頭を大文字にするか否かについては，様々な場合があるので特に制限は設けません。論文内で一貫していることを原則とします。（下記 1-2, 1-3, 1-4, 1-5 参照）

・日本語では，著書名を二重かぎ括弧（『……』） で囲んでください。（下記 1-6 参照）

・ページ指定については，日本語の場合でも, p.53.，pp.65f. などとしてください。（下記 1-6 参照）

1-1: Plato, *Ap.*, 29d3.

1-2: Philo Alexandrinus, *Legem allegoriarum*, 3.167; 3.244.

1-3: Augustinus, *De civitate Dei*, VIII, c.4.

1-4: Anselmus, *De Grammatico*, c.I, 146.4-6.

1-5: Thomas Aquinas, *In IV Sent.*, d.5, q.1, a.3, c.

1-6: アウグスティヌス『自由意志論』第 2 巻第 19 章第 53 節.（『アウグスティヌス著作集』第 3 巻「初期哲学論集（3）」所収. 泉治典訳, 教文館, 1989 年, pp.135-136.）

2.8.2 二次文献の引用（1）―書籍の場合

［引用の仕方］著者名・書名・（翻訳者）・発行地・発行年，参照ページ

・欧文では，著作家名についてはローマン体を用い，著書名についてはイタリックを用いてください。（下記 2-1, 2-2 参照）

・欧文の編纂者名，翻訳者名は名前の後に，(ed.)，(tr.) と入れてください。（下記 2-1 参照）

・和文では，書名を二重かぎ括弧（『……』）で囲んでください。（下記 2-3, 2-4 参照）

・ページ指定については，日本語の場合でも, p.53.，pp.65f. などとしてください。（下記 2-3, 2-4 参照）

2-1: G.R.F.Ferrari (ed.), T.Griffith (tr.), *Plato: The Republic*, Cambrige, 2000.

2-2: M.-D.Chenu, *Introduction l'tude de Saint Thomas d'Aquin*, J.Vrin, 1984, pp.126f.

2-3: 山内志朗『存在の一義性を求めて―ドゥンス・スコトゥスと 13 世紀の〈知〉の革命』岩波書店，2011 年，p.69.

2-4: F.コプルストン『中世哲学史』箕輪秀二・柏木英彦訳, 創文社, 1970 年, pp.89-90.

2.8.3 二次文献の引用（2）―書籍掲載論文の場合

［引用の仕方］著者名・論文名・編者名・書名・発刊地・発刊年・（掲載ページ），参照ページ

・論文の題名：欧文の場合はダブルクォーテーションで囲み（下記 3-1 参照），和文の場合は一重かぎ括弧（「……」）で囲んでください（下記 3-2 参照）。

・書名：欧文の場合はイタリックにし（下記 3-1 参照)，和文の場合は二重かぎ括弧（『……』）で囲んでください（下記 3-2 参照）。

・ページ指定については，日本語の場合でも，p. 53.，pp.65f. などとしてください。（下記 3-2 参照）

3-1: A.C.Lloyd, “Grammar and Metaphysics in the Stoa”, A.A.Long (ed.), *Problems in Stoicism*, The Ashlone Press, 1971, pp.61ff.

3-2: 大森正樹「パラマスのエネルゲイア概念とネオプラトニズム―エネルゲイア概念の源泉を求めて」,『新プラトン主義の影響史』，昭和堂，1998 年，pp.253-283.

2.8.4 二次文献の引用（3）―雑誌掲載論文の場合

［引用の仕方］著者名・論文名・雑誌名・号数・発行年・（掲載ページ），参照ページ

・論文の題名：欧文の場合はダブルクォーテーションで囲み（下記 4-1 参照），和文の場合は一重かぎ括弧（「……」）で囲んでください（下記 4-2 参照）。

・雑誌などの名称: 欧文の場合はイタリックにし（下記 4-1 参照），和文の場合は二重かぎ括弧（『……』）で囲んでください（下記 4-2 参照）。

・ページ指定については，日本語の場合でも, p. 53.，pp.65f. などとしてください。（下記 4-2 参照）

4-1: L.Steiger, “Contexe Syllogismos. ber die Kunst und Bedeutung der Topik bei Anselm”, *Analecta Anselmiana I*, 1969, pp.107-143.

4-2: 上枝美典「神・存在・現実―トマス・アクィナスのエッセ解釈の試み」,『アルケー（関西哲学会年報）』第 14 号，2006 年 6 月，pp.141-156.

2.9 欧文著作引用の際の略語

2.9.1 一般規則

・略記の仕方には国によって様々なやり方がありますが（ラテン語の op.cit.がドイツでは a.a.O. となるなど)，『中世思想研究』では原則的にラテン語で統一します。

・略語の書体については，略語を用いない場合にイタリック体を用いる場合にはイタリック体を用い，それ以外の場合にはローマン体を用います。

（例）*op.cit.*　pp.25ff.　*ibid.*　*loc.cit.*　e.g.　i.e.

・「アルファベット小文字 1 文字－ピリオド」の繰り返しの場合，間にスペースは入れないでください。

（例）e.g.　i.e.　s.v.

・アルファベット大文字からなる省略語は，ピリオドをつけないで並べてください。

（例）VT　LXX　NT　OLD　LSJ

・注番号の直後に略語が来る場合，最初の文字は大文字にしてください。英・独・仏，いずれの場合にもこれが正式です。

（例） 12) Cf. *An*., II.3.414a29-b19.

2.9.2 略語一覧

以下に欧文著作を引用する際の略語を列記します。和文の場合は前掲書などとしてください。

AD と BC	: AD は数字の前に，BC は数字の後に置くのが正しい用法です。
ca.	: circa. 年代を示すときに「約」の意味で用います。 : c. より ca. の方が望ましいです。
cf.	:「参照」。
ed. edd. eds.	:「編纂者」。
e.g.	:「例」。e. と g. の間にスペースは挿入しません。
f. ff.	: pp.52f. pp.52ff.
ibid.	: ibidem 「同上」
i.e.	: id est 「つまり」
l. ll.	:「行」l.125 ll.125-127
loc.cit.	:「引用箇所」
ms. mss. MS MSS	: 写本。大文字の場合ピリオドは省略します。
op.cit.	:「前掲書」
p. pp.	: ページ p.24 pp.24f. pp.24-26
sq. sqq.	:「以下」
tom.	: tomus
tr. trr.	:「翻訳者」
vid.	: vide
v. vv.	: versus
vol. voll.	: 「巻」

2.10 欧文引用の国による違い

・以上，欧文著作を引用する際の略語について述べましたが，これらに相当する略語は国によって異なります。

たとえばドイツ語では，S.126　Vgl.　5.Au.　Bd.5 などと書き，イタリックはあまり使いません。

・また引用符も国によって異なります。

英米：“...”

独　：„...“

仏　：《 ... 》

・したがって，ドイツやフランスの文献を引用するときに，出版国のスタイルで引用を行なうことは当然のことですので，『中世思想研究』でもこれに従って引用を行なって構いません。

Vgl. EDELSTEIN, aaO, S.89ff. Es ist auch charakteristisch, da der Begriff Zeit meist nur im Plural verwandt wird (tempora) — freilich in ganz anderen Sinne als bei den Hebrern (vgl. von RAD, aaO, II 114).

Cette doctrine a été bien analysée par Cayr, *Contemplation augustinienne*, p. 47-73, 《 Origine surnaturelle de la sagesse 》.

・しかし，時にはこれらの問題が複雑に絡んだ文献を引用しなければならない場合もあります。

T.Ebert, “Dialecticians and Stoics on the Classication of Propositions”, K.Dring u. T.Ebert, *Dialektiker und Stoiker — Zur Logik der Stoa und Ihrer Vorlufer*, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 1993. S.112-127.

・この実例はドイツで出版された論文集の中の英語論文の引用なのですが，このような場合，

(a) 著作名を英語式にイタリックにするか否か，ドイツ語式にローマン体で書くか，

(b) ページの引用の仕方を英語式にするか，ドイツ語式にするか

といった問題が出てきます。

・この実例では，著作名を英語式にイタリックにし，ページ引用をドイツ語式にしていますが，このような場合の基準は特にありません。

・したがって，このような場合の引用は著者の判断に基づき，「論文中で一貫させる」という方針で行なってください。

3 参考文献

・日本エディタースクール『文字の組み方ルールブック―ヨコ組編』，日本エディタースクール出版部，2001 年.

・日本エディタースクール『校正記号の使い方，第二版』，日本エディタースクール出版部，2007 年.

・Oxford University Press, *New Hart's Rules: The Handbook of Styles for Writers and Editors*, Oxford, 2005.

・オックスフォード大学出版局,『オックスフォード大学出版局の表記法と組版原則』小池光三訳，ダヴィッド社，1983 年.

・The University of Chicago Press, *The Chicago Manual of Style,* the 16th edition, 2010.

・『シカゴ・スタイル研究論文執筆マニュアル』，沼田隆，沼田好雄訳，　慶應義塾大学出版会，2012 年.（前掲書，第 7 版の翻訳）

・Ewarld Standop, Die Form der wissenschaftlichen Arbeit, 15.Auflage, UTB fr Wissenschaft 272, Quell & Meiyer, 1995.

・http://www.duden.de/sprachwissen/rechtschreibregeln